

若年者と高齢者のブログに表れたパーソナリティタイプの相違

渡部 諭

秋田県立大学総合科学教育研究センター

watanabe314@gmail.com

概要 本研究は、若年者ブログと高齢者ブログについて、社会情動的選択性理論による積極性効果とビッグ・ファイブ仮説に基づくパーソナリティタイプに関する分析を行ったものである。分析は名辞仮説に基づいて、ブログページのテキスト上の形容詞に関して、その出現頻度比率に関する分散分析を行った。その結果、若年者ブログについては傾向と文のそれぞれの主効果およびそれら 2 要因間の交互作用が明らかになった。一方、高齢者ブログについては傾向の主効果のみが観察され、正の傾向が負の傾向より出現頻度比率が有意に大きいことが明らかにされた。本研究は、高齢者に提示される刺激に対してだけでなく、高齢者自身が生成したブログページにも積極性効果が観察される可能性があることを示すものである。今後の研究の方向として、対象ブログ数を増やすことと高齢者ブロガーの年齢を統制することが必要であると考えられる。

キーワード 高齢者, 社会情動的選択性理論, パーソナリティタイプ, ブログ

1 はじめに

周知のようにわが国は平成 19 年以来超高齢社会に入った。超高齢社会はただ単に高齢化率が 21%以上で高齢者人口が増大したという意味以上に様々な影響を社会に与えている。たとえば、高齢者によるインターネット利用率自体は若年層より低いが、利用率の増加の割合は他の世代に比べ増大している。また、高齢者による ICT 利用に関する意識は次第に若年層との差を見出すことが困難になりつつある。これは、現役時代に仕事でインターネットを利用していた世代が高齢世代に入った結果と言える。このように、現代の高齢者像は、引退後は世間との関係が絶たれ、主に孫の面倒を見るような自宅を中心にした活動をするだけという過去の高齢者像に対する変革を迫っている。

一方、高齢者認知心理学の分野では、過去には離脱理論・活動理論・継続理論が提唱されたが、現在最も注目されている理論は社会情動的選択性理論 (Socioemotional Selectivity Theory, 以下 SST) [1, 2] である。この理論が先行理論と大きく異なる点は、高齢者の認知や行動の特徴を年齢の関数ではなく、自分の人生に残された時間がどの程度であるかの認識に依存する点である。人生の残り時間がまだ長いと感じる若年者は新しい知識を求める知識志向であるのに対して、人生の残り時間が少ないと感じる高齢者は情動的な満足を重視する情動安定志向であると主張する。

さらにこの理論より次のような積極性効果 (positivity effect) が導かれる [3]。SST によれば、高齢者は知識志向であるより情動的な満足を重視する情動安定志向であるために、自身に提示された刺激の中から選択的に

ポジティブな部分に注目する傾向があるというものである。たとえば、大勢の人間がいる場面で、高齢者は怒っている顔よりは笑顔により注目する傾向がある。なぜならば、その方が情動的な安定が得られるからである。この積極性効果は高齢者が与えられた外部の刺激に対して反応する場合について成り立つ規則であるが、一方高齢者が何かについて記述したりあるいはウェブページを作成する場合に、作成された文章やウェブページには積極性効果は成り立たないであろうか。すなわち、提示された刺激に対する反応のみならず、高齢者の生成物に関しても積極性効果が成立するのか、本研究の第 1 の目的はこの問題の検討を試みるものである。

ところで、パーソナリティ理論の分野で現在最も支持を得ている仮説はビッグ・ファイブ仮説である [4]。この仮説はパーソナリティは 5 個の次元によって説明できるとするものである。5 個の次元とは、研究者によって多少の違いはあるが、外向性・神経症的傾向・経験への開放性・協調性・誠実性とされている。このビッグ・ファイブ仮説を構成する上で有用な仮説となったのは名辞仮説といわれるもので、これは人間の行動における重要な個人差はことばとして表されるというものである。名辞仮説に基づくならば、ウェブページのテキストにおいても個人差が表れていることになり、さらに、ビッグ・ファイブの 5 個の次元も分析できることになる。本研究の第 2 の目的はウェブページ上のビッグ・ファイブの分析を行うものである。

以上の 2 つの目的を同時に満たすために、テキストで用いられた形容詞とビッグ・ファイブとの関係について検討した先行研究に注目する。その中で本研究では [5] で分析された 435 個の形容詞に注目し、積極性効果と

ビッグ・ファイブ仮説について検討を加える。

2 方法

2.1 ブログの選択と抽出

ウェブサイトの抽出を行う際に、すべてのサイトを対象にして抽出を行う場合にはもちろん無作為抽出を行うことが望ましい[6]。ところが、本研究のように若年者ブログと高齢者ブログという非常に限定されたウェブサイトを対象にする場合には完全な無作為抽出を行うことは不可能であり、ウェブページに掲載されたブロガーリストの中から無作為抽出を行うことが現実的である。

そこで、若年者ブロガーと高齢者ブロガーによるブログを抽出するために、前者についてはサイト”UNTEMLATER”の”40 Young Bloggers Who Will Get You Excited to Shatter the Template Lifestyle”(www.untemplater.com/mobile-lifestyle/37-young-bloggers-who-will-get-you-excited-to-shatter-the-template-lifestyle/)に掲載の40個のブログサイトを、また後者についてはサイト”TIME GOES BY”の”Elderbogs”(www.timegoesby.net/weblog/elderbogs.html/)に掲載の298個のブログサイトを対象に標本抽出を行った。まず前者については、40個すべてのサイトについて以下に述べるすべての分析を行った結果、分析がすべて成功したサイトは25個であった。分析が不可能であった理由は、正常なアクセスができなかった場合や後述するWebsite Explorerのメモリ不足であった。また、後者については、予めランダムに抽出した20個のサイトについて分析を行った。

以上のように選択した若年者ブログと高齢者ブログについて、Website Explorer(www.umechando.com/webex/)を用いてサイトのすべてのページが抽出された。なお、その際に検出したページ数やサイトの総ページ数などの情報もサイトレポートとして収集された。

2.2 テキストの抽出と処理

抽出されたサイトのページより H2Tconv(nekomimi.la.cococan.jp/freesoft/h2tconv.htm)を用いてテキスト部分のみの抽出を行った。

さらに、ウェブページ上で自己開示[7]を行う場合には”I”を主語とする文において行われることが多いことが予想されるため、抽出したテキストの中から主語が”I”の文の抽出を行った。具体的には、”I am”, ”I’m”, ”I was”, ”I will be”, ”I’ll be”, ”I have been”, ”I’ve been”の7個の文をすべて抽出した。これには JGREP2(www.hi-ho.ne.jp/jun-miura/jgrep.htm)を用いた。

2.3 ビッグ・ファイブ仮説を用いた分析

前述の方法で抽出された”I”を主語とする文の中で用いられている形容詞に注目し、それらをビッグ・ファイブ仮説の5個の特性に分類する。そのために[5]に掲載

された435個の形容詞を用いて辞書を作成し、それをLinguistic Inquiry and Word Count 2007(www.liwc.net/)に組み込んで分析を行った。このソフトは、テキストに含まれるすべての語をカテゴリ毎に分類する機能を持ち、分類したいカテゴリを辞書として作成し組み込む。Linguistic Inquiry and Word Count を用いてブログの分析を行った研究としては本研究以外に[8]があり、5個の次元を抽出している。ただしこの5個の次元は言語上の因子として抽出されたものであり、本研究が対象とするパーソナリティタイプとしての5個の因子とは異なる。

[5]では435個の形容詞について、5個の因子に関する因子負荷量が掲載されている。5個の因子は、外向性・協調性・誠実性・情緒安定性・知性である。因子負荷量の絶対値が0.3以上の値を示す因子をその形容詞が強く関係する因子と考え、因子負荷量の絶対値が0以上0.3未満の場合をその形容詞が弱く関係する因子と考えた。さらに、因子負荷量の符号によって該当する因子と正の関係を示す場合と負の関係を示す場合とが考えられる。したがって、435個の形容詞を用いてLinguistic Inquiry and Word Count 2007の辞書を作成する場合にも、それぞれの因子との関係が強い弱いかにについての情報と正・負の関係のいずれを示すのかについての情報を含めて作成を行った。

以上より、分析結果は上の7個の文のそれぞれについて、ある因子との関係が強い弱いかの情報と正であるか負であるかの情報の組み合わせで4通りの場合について、それぞれの形容詞の出現頻度の情報が得られる。

3 結果

3.1 若年者ブログの分析

Linguistic Inquiry and Word Count 2007の出力から、7個の文のそれぞれに関して、4通りの場合(5個の因子のそれぞれとの関係が強い弱いかと正であるか負であるか)についてそれぞれの形容詞の出現頻度の比率が得られる。このデータにおいて、因子との関係の強弱の情報を区別しないことにすると、7個の文のそれぞれに関して、因子との関係が正か負かのそれぞれの場合における形容詞の出現頻度の比率が得られる。以下の分析ではこのデータを用いる。

以後、因子との関係が正か負かという情報を傾向と呼ぶことにし、因子・文・傾向を3個の要因とする繰り返しのある三元配置の分散分析を行う。その結果、傾向の主効果($F=6.040, p<0.05$) (図1)と文の主効果($F=4.358, p<0.001$) (図2)および傾向と文の交互作用($F=2.026, p<0.1$) (図3~7)が得られた。

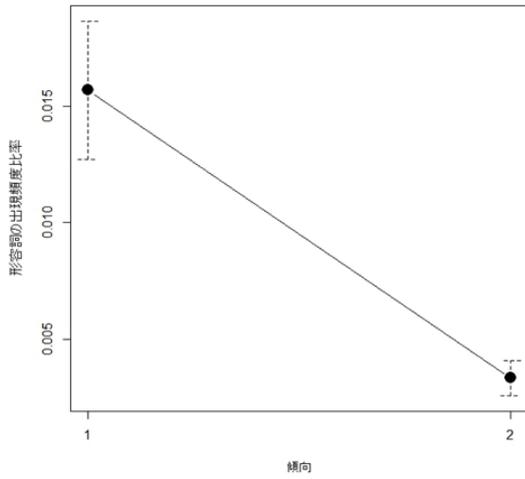


図1 傾向の主効果

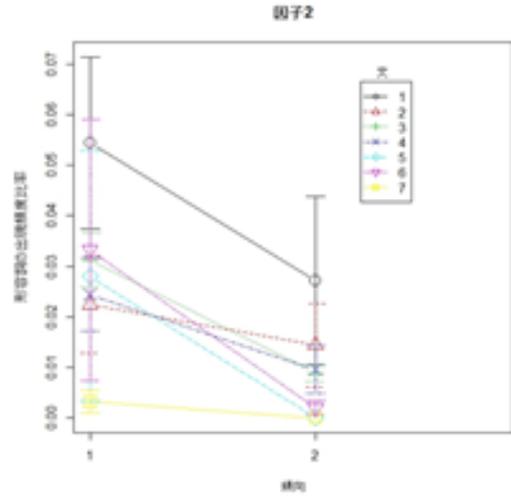


図4 傾向と文の交互作用(因子2)

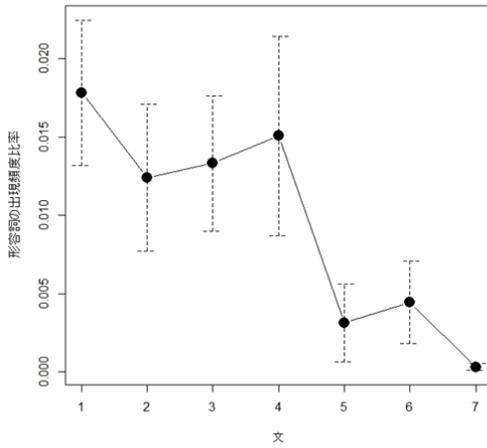


図2 文の主効果

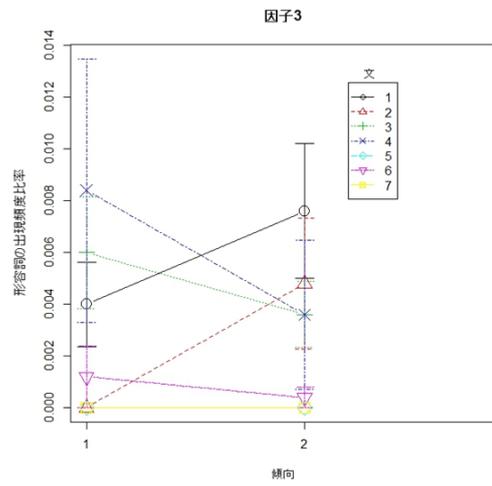


図5 傾向と文の交互作用(因子3)

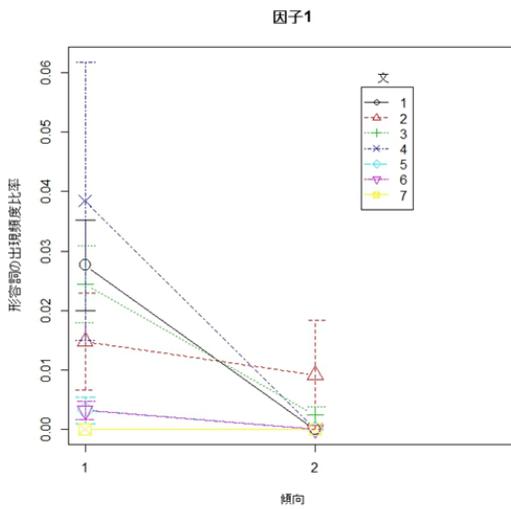


図3 傾向と文の交互作用(因子1)

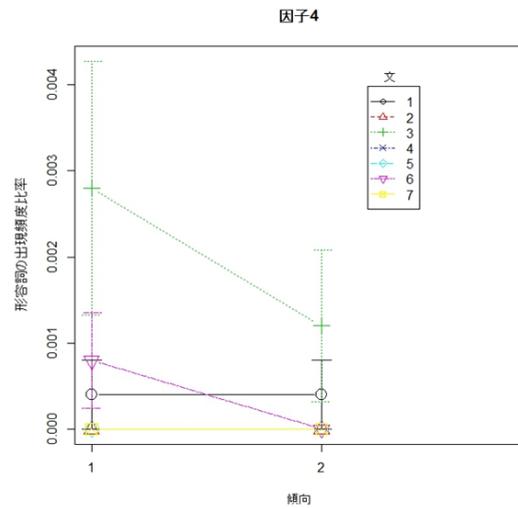


図6 傾向と文の交互作用(因子4)

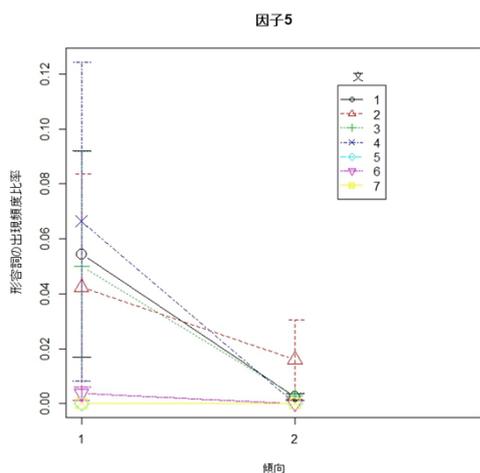


図7 傾向と文の交互作用(因子5)

3.2 高齢者ブログの分析

高齢者ブログについても若年者ブログと同様の分析を行う。その結果、傾向の主効果のみが得られた ($F=3.243, p<0.1$) (図8)。

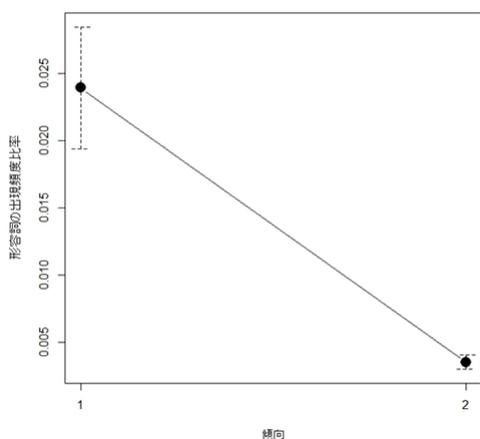


図8 傾向の主効果

続いて、傾向に関して Bonferroni の多重比較を行った結果、正の傾向が負の傾向より出現頻度比率が有意に大きいこと ($p<0.001$) が明らかにされた。

4 考察

若年者ブログと高齢者ブログのテキストを対象に、名辞仮説に基づいて積極性効果の有無およびビッグ・ファイブ仮説によるパーソナリティタイプの分析を行った。その結果、若年者ブログにおいては傾向の主効果と文の主効果および傾向と文の交互作用が得られた。一方、高齢者ブログにおいては傾向の主効果のみが得られ、正の傾向が負の傾向より強いことが明らかにされた。

社会情動的選択性理論から導かれる積極性効果は、高齢者が提示された刺激のポジティブな部分に注目することを主張するものであるが、本研究は高齢者自身が生成したブログページにも積極性効果が観察される可能性があることを示すものである。

現在のところ、高齢者自身が作成したものに対する積極性効果に対して検討を加えた研究は見当たらない。また、積極性効果は高齢になるほど強いと言われている[9]。そこで、今後の研究の方向として、対象ブログ数を増やすことと高齢者プログラの年齢を統制することが必要であると考えられる。

ビッグ・ファイブ仮説に基づくパーソナリティタイプに関しては有意な結果が得られなかった。これは、Linguistic Inquiry and Word Count 2007 の辞書として組み込んだ形容詞が 435 個であり、分析対象のテキストを構成する語数に比較して圧倒的に少ないことが原因であると考えられる。また、ブログページ上の自己開示を把握するために主語が”I”の文を対象とした点も改良の余地がある。以上の点は今後の検討課題である。

参考文献

- [1] Carstensen, L. L., Isaacowitz, D. M. and Charles, S. T.: Taking time seriously A theory of socioemotional selectivity, *American Psychologist*, Vol.54, pp. 165-181, 1999.
- [2] Carstensen, L. L.: Selectivity theory: Social activity in life-span context, *Annual Review of Gerontology and Geriatrics*, Vol. 11, pp. 195-217, 1991.
- [3] Carstensen, L. L. and Mikels, J. A.: At the intersection of emotion and cognition Aging and positivity effect, *Current Directions in Psychological Science*, Vol.14, No.3, pp. 117-121, 2005.
- [4] 中島義明・繁樹算男・箱田裕司: 新・心理学の基礎知識, 有斐閣, 2005.
- [5] Saucier, G. and Goldberg, L. R.: Evidence for the Big Five in analyses of familiar English personality adjectives, *European Journal of Personality*, Vol.10, pp.61-77, 1996.
- [6] Baykan, E., de Castelberg, S. and Henzinger, M.: A comparison of techniques for sampling Web pages, 26th International Symposium on Theoretical Aspects of Computer Science STACS 2009, pp. 13-30, 2009.
- [7] 川浦康至, 三浦麻子, 森尾博昭: インターネットにおける自己呈示・自己開示, インターネット心理学のフロンティア, pp.59-85, 2009.
- [8] Kramer, A. D. I. and Rodden, K.: Word usage and posting behaviors: Modeling blogs with unobtrusive data collection methods, *CHI 2008 Proceedings*, pp. 1125-1128, 2008.
- [9] Mroczek, D. K. and Stang, C. M.: The effect of age on positive and negative affect: A developmental perspective on happiness, *Journal of Personality and Social Psychology*, Vol.75, pp. 1333-1349, 1998.